

教員養成のための資質チェックリストの運用と

新しい評価システムの提案

寺嶋 浩介 (長崎大学教育学部)

藤木 卓 (長崎大学教育学部)

松野 絵理 (長崎大学教育学部附属幼稚園)

隈部 有希 (長崎大学教育学部附属特別支援学校)

森内 秀学 (長崎大学教育学部附属小学校)

山田 英基 (長崎大学教育学部附属小学校)

角家理恵子 (長崎大学教育学部附属中学校)

1. これまでの研究経過

教育実地研究をテーマとした学部と附属の共同研究は2005年度から実施され、これまで学生に身につけさせたい教師の資質リストを開発し、改善してきた[1][2][3]。また、昨年度においてはこれからの運用方法について提案した[4]。この成果は本紀要に年度ごとに掲載してきており、一定の評価を得ている。

本年度においては、それを一層発展させ、各附属校・園においてその資質チェックリストを運用することにした。各附属校・園の実習期間の長さや置かれている状況にもよるので、初めからその活用方法に拘束を設けず、ある程度自由な形で実施することにした。その結果、一定の成果と課題が見られたので報告する。

なお、実施において活用した資質チェックリスト[3]を次ページ表1として再掲する。

2. 各附属校での実践

(1)特別支援学校

昨年度、計画されていたとおりに実施した。実際には、5/13(初日)、5/20、5/23、最終レポート提出日の4回実施している。このうち、初日以外を除く3回は、担任からのコメントを書く形にした。

このようになかなか短い期間で実施されたが、担任からは負担の声が上がったのもあり、9月実習では担任のコメントを書くのを2回に減らして実施した。

学生がこれを付けることで、自分の行動を振り返ったり目的意識をもって過ごしたりすることに繋がるのではないかと考えるが、一方で「付けているだけ」の学生もいるのではないかと考えられる。学生の中には、つじつまを合わせるように1段階ずつ評価をあげているよ

うな様子も見られる。また、このチェックに取り組むことで、2週間で本当に資質があがるのかという疑問も出ている。

表1 開発されたチェックリスト[3]

カテゴリ	項目
1	礼儀正しく、謙虚な態度で人と接することができる。
2	場に応じた服装や言葉遣いができる。
3	時間を守って行動することができる。
4	心身共に健康であり、健康管理ができる。
5	人と協力をして行動することができる。
6	向上心を持って、積極的に行動することができる。
7	明るく笑顔で人と接することができる。
8	マナーやルールを守って行動することができる。
9	身の回りの整理整頓ができる。
10	計画性を持ち、仕事を遂行できる。
11	子どもを、客観的に捉えることができる。
12	子どもを、多面的に捉えることができる。
13	子どもを、公平に捉えることができる。
14	子どもの健康状態を、的確に捉えることができる。
15	優しさと厳しさをあわせ持ち、臨機応変に子どもへ対応することができる。
16	子どもの思いを受け止め、共感することができる。
17	子どもと真剣に向き合い、根気強く対応することができる。
18	時と場に応じた、子どもの安全管理ができる。
19	自分なりの課題を持って、観察することができる。
20	子どもの実態を、学習展開に活かすことができる。
21	適切な目標を設定し、それを達成するための展開や評価の観点を構想することができる。
22	子どもの発達段階や予想される反応を想定して、展開を構想することができる。
23	必要な教材・教具や道具を準備することができる。
24	子どもの状況に応じて、適切な話し方で発問や助言ができる。
25	分かりやすい板書や、適切な教材・教具等の提示ができる。
26	ICT機器の、効果的な活用ができる。
27	指導過程における適切な評価を行い、結果をフィードバックして、指導や援助を進めることができる。
28	実施した授業の反省を適切に行い、次に活かすことができる。
29	他の実習生や教員と、積極的に関わることができる。
30	他の実習生の授業や保育づくりに、積極的に協力することができる。
31	他の実習生や教員からの助言や指導を、謙虚に受け入れ活かすことができる。
32	課題/研究レポート 実習を振り返り、視点を基に分析的に書くことができる。

(2) 小学校

5月実習においては、実習開始日に全ての項目に目を通させ、共通理解させた。そのうえで、毎週金曜日の放課後に行う実習生ミーティングの際に、その週の自分を振り返るために利用した。そこで明らかになった課題は、翌週の学生自身の課題として認識させ、日録を書くときの視点にさせた。その結果、自分の課題がはっきりし、視点を持って自己分析したことが日録に書き込まれていた。

また、指導教諭が実習生を評価する基準そのものの見直しを行うためにも活用している。見直した評価項目を基に、実習後、実習評価の評定を付けた。結果、評価項目を見直したことで、似通って評価していた部分や、評価の視点として足りなかった部分が補われ、よりの確な評価ができるようになった。また、教諭間でも、評価が付けやすかったとの声が開かれた。

課題としては、放課後の時間が短く、学生が自己評価した資質リストに対し、指導教諭からのアドバイスやフォローが得られにくかったという点があげられる。

9月実習においては、事前打合せの時に学生に配布し、第1回目の実習生ミーティングのときに、改めてチェックリストを見て、今自分に備わっている資質を確認させたり、今後自分に必要な資質をチェックさせたりした。しかしながら、別途配布されたアンケートが本チェックリストと似通っていたため、アンケートのみを実施し、チェックリストは活用しなかった。

(3)中学校

昨年度と同様の方法で実施した。学生が実習に来た際に、個人の力を伸ばすための指針となるように提示し、個人がABCで評価して、次週に生かす、というものとした。リストを初日に提示し、日録に貼らせて週ごとに記録をするようにさせた。指導教員は、その個人評価を見て、気になった時やCなどがあつたときに助言をしたり、教師側が実習生を評価する際に照らし合わせるというようにしたので、達成を目指す視点として意識づけさせることができたと言える。

このようにある一定の成果は見られるが、実習の前後だけや実習期間中にのみ、そのリストや達成目標を提示するだけでは、学生にはその大切さは伝わらないと考えられる。大学での事前指導とあわせて改善していく必要がある。

(4)幼稚園

実習生自身の資質を向上させることを意図させ、より学生の主体的な実習とするため、5月実習では中間日に活用した。具体的には、評価表を用いて自己評価をさせることで、より目的を明確にして残りの実習を実践できるように仕掛けた。

結果、実習自体には学生は熱心に取り組んだものの、資質の向上という視点からすると、2週間でどこまで出来るかという点では限界がある。ただ、振り返るためのきっかけとしては位置づけることができるのではないかと考えられる。

3. 成果と課題

本プロジェクトにおいては、これまで学生（教育実習生）を対象として、教師としての資質向上のためのチェックリストを数年にわたり、開発・改善してきた。それが本年度は4校園すべてで、運用することができた。そこでは、学生自身が何を身につければ良いのかという意識付けをすることについてはある程度寄与できたのではないかと考えている。

一方、残された課題も多い。ひとつには実習中にどのように運用していくかについて、ある程度定型化していくことが考えられよう。学生に単にそれを見せてチェックをさせればよいだけでなく、どのような時期・環境で振り返らせるのか、それに対して教員側からどのようなフィードバックを与えるのが重要である。今回、この運用は各校・園に委ねた。結果、毎週実施した附属校もあれば、中間日に実習の後半へとつなげるひとつのきっかけとして利用した附属校もある。今後はどのようなタイミングで実施するのかということを検討す

必要がある。また、本チェックリストをどのタイミングで提示し、実習と連携させて実施していくかについては、事前指導・事後指導との連携で考えていかねばならないであろう。

また、各附属校・園で共通して出されていた課題としては、「このようなチェックリストを利用して、果たして実習生の力量が形成されていくのか」という疑問点は共通している。確かに、短期間で身につけることのできる資質はさほど多くなく、むしろほとんどないといっても過言ではない。ただし仮にそうだとしたら、この短期間の附属校・園での教育実習において、一体学生にどのような力量を形成させることができているのか、あるいは形成しようとしているのかについて、こうしたチェックリストを通して述べていく「説明責任」も附属校・園には求められよう。具体的には、チェックリストを集計して、全体的な傾向を量的にまとめていくことも必要であるし、こうしたチェックリストを用いて学生が実習についてコメントすることで、振り返りが質的に向上しているかについて検討することも求められる。もちろん、これらのことは附属校・園に委ねるだけではなく、教育学部全体の評価として取り組んでいかねばならない。

4. おわりに—新しい評価システムの提案

本来であれば、前節において述べるべきことであるが、これから数年の教育学部の教育システムについて考えておかねばいけない点があるので、最後にまとめておきたい。

本研究プロジェクトを進めていく際に課題にあがった大きな問題のひとつに、「評価の多さ」があげられる。例えば、この資質チェックリストに関わるものとしては、今回関係するものだけでも以下のものがあつた。中には内容が重なるため、こちらで予定していたものが中止になってしまう事態も発生している。

- ・ 幼稚園で実習終了後に行うアンケート
- ・ 小学校での学部長裁量経費プロジェクト（メンターの導入に関するもの）において関連して行われたアンケート（これは事後指導でも重なりが見られることがわかつた）
- ・ 教職実践演習の実施のために運用されはじめた「履修カルテ」

この他に本プロジェクトに関して言えば、教育学部内での進路に関するアンケートなどで教職に対する志望などが、聞かれたりしている。なかにはかなり突発的に実施されるものも多い。

これらは、全く同じものではないが、質問項目は類似しているものがあつたりする。この評価に関わる教育学部の教員がそれぞれに実習体制や教育システムの改善を考えて実施され、近年の教員養成における教育のニーズを踏まえたものばかりである。しかし、これらがその対象となる附属校・園や学生を苦しめて「評価疲れ」「アンケート疲れ」に至らせてしまっている点を否定できない。

本プロジェクトを含めて、個々のプロジェクトや教員同士の関係を越えた新しい評価システムの構築が望まれる。具体的には、この手の評価アンケート等ははじめから年間予定に必ず位置づけ、例えば附属学校連絡協議会等が中心となり、評価を認める機関においてその承認を経て実施されるべきである。また、そこから生み出されたデータは個人情報に配慮しながら、全員に共有されるべきである。

近年、大学教育において IR (Institutional Research) の概念が重視されるようになった。組織的に評価システムを構築し、そこで得られた成果を組織的に教育や研究に活かしていくという取り組みである。教育学部にもまさにこのように評価を核とした教育・研究体制が築かれているのではないだろうか。これらの点を踏まえ、本プロジェクトでは、チェックリストを用いる狭義の評価だけでなく、全学部をあげた組織的な運用につながるように、貢献していきたいと考えている。

そして、評価システムとともに考えたいのが、評価の対象となる教育実習そのものの改善と、学部の講義との有機的な接続である。実習の実施に関わる業務だけではなく質の向上に関わる検討を、教育実習委員会において行う必要がある。実習の質の改善を意図して初めて、資質チェックリストの活用による評価システムが機能しはじめるのではないだろうか。また、このことは学部の講義と実習の関係についても言える。教科専門の講義や演習等で行われる授業を教職専門の講義や演習等どのように接続するか、そしてそれらの成果を教育実習とどのように接続するかが重要である。学部の授業、教育実習、そしてチェックリスト等での評価、これらが有機的に接続し合い、機能し合うときに、本学部における教員養成の質の向上が実現するのだと考えている。教育改革の流れの中で、この視点は堅持されるべきであろう。

付記

本論文は、長崎大学教育学部附属教育実践総合センターによる 2011 年度「学部と附属の共同研究」の支援を受けた。

参考文献

- [1] 寺嶋浩介, 小原達朗, 古野祐一, 坂口洋介, 田中秀明, 寺田弥寿子, 中里かをる, 高谷有美(2006) 体験を重視した教育実地研究カリキュラムの構成要素 —長崎大学教育学部附属 4 校園を対象とした分析を通して—。長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第 5 号,1-12
- [2] 寺嶋浩介, 林朋美, 田中秀明, 原京子, 寺田弥寿子, 中里かをる, 高谷有美, 坂口洋介, 小原達朗, 龍造寺裕則 (2007) 教員養成のための資質リストの開発 —学部と附属学校園の共同研究を通して—。長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第 6 号,49-58
- [3] 藤木卓, 寺嶋浩介, 森内秀学, 田下寛正, 高谷有美, 松野絵理 (2010) 教育実習に関する資質保証のためのチェックリストの改善。長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第 9 号,1-4
- [4] 藤木卓, 森内秀学, 山田英基, 角家理恵子, 高谷有美, 松野絵理 (2011) 教育実地研究改善のための資質確認リスト活用策の検討。長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第 10 号,1-8